

脳／美学

— 脳科学のイメージ（論） —



「脳の10年」とも呼ばれた1990年代以降、脳科学は「心」のメカニズムにかんして次々と新しい発見をもたらしている。その成果はいわゆる自然科学の領域を超えて、人文学の領域にも少なからず影響を与えてきた。それは美学・芸術学として例外ではない。「神経系美学」と呼ばれる分野は、脳科学を積極的に応用しながら美学を鍛えなおす新たな可能性を提示している。

しかし、視覚イメージの認知や生成の過程を明らかにしようとするこうした試みは、その方法自体が脳をイメージ化する技術と脳＝イメージの読解に基づいているということをしばしば忘れていているようにも思われる。本研究会では、脳科学のイメージ（論）に光を当てながら、脳科学がイメージ論において持ちうる可能性について議論する。

パネリスト：

門林岳史

(関西大学)

井上研

(名古屋大学大学院)

岩城覚久 × 真下武久

(関西学院大学大学院)

真下武久

(成安造形大学)

唄邦弘

(神戸大学大学院)

2011年11月19日（土）13時～
神戸大学文学部：A棟1階学生ホール

主催：神戸大学芸術学研究会
神戸大学大学院人文学研究科
古典力・対話力プログラム
映像諸文化研究会

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/art-theory/event2011.html>